第14号　平成10年8月

団塊のカタログ

ワシトシタローのグラフィティ

湯島小学校1年1組

東京都文京区立湯島小学校、創立127年を誇るわが国最古の小学校の一つである。

明治3年（1870年）政府は**東京府**に6つの小学校を設置する方針を固めた。

その内の1校として本郷本妙寺に設置され翌明治4年（1871年）12月2日、湯島切通坂上の麟祥院（りんしょういん）に移り、小学校第四校に指定されたのが我が母校である。

因（ちな）みにこの麟祥院、徳川三代将軍家光の実母とも乳母とも伝えられる春日局（かすがのつぼね）の菩提所としても有名である。（春日通りの由来）

♬教えの道に　名も高き
　聖（ひじり）をしのぶ　湯島台
　都をなかば　見渡して
　学びの窓の　あかるさよ
♬われらの庭に　程（ほど）近き
　社（やしろ）の春の　さきがけに
　雪霜（ゆきしも）しのぎ　咲く梅は
　たゆまぬ人の　よきかがみ
♬我らも強く　伸びゆきて
　心を富ませ　身をおさめ
　ならばや国の　柱とも
　大東京の　命とも

近くに**湯島天神**のお社がある。

聖とはむろん**菅原道真公のこと**。

ワシはこの校歌が好きだった。早く覚えたくてひとりでコッソリ練習したほどで、そのかいあってか今でもスラスラと歌詞とメロディが出てくる。呑み会などでこの校歌を歌い上げるのが定番であったが、大体イヤな顔をされるので今はやめている。

☆

ワシは1年1組であった。

担任は井出清二（いでせいじ）先生。

当時の湯島小学校、4年生に上がる時だけクラス再編成が実施されていて、担任はその学年ごとにかわることが多かった。

そんな中で、井出先生には1年・2年・3年とフルタイムで受け持ってもらった。

熱血漢で生徒に人気のある先生であった。

3年生の始業式に担任の発表が行われるのは子供たちも知っていたし、あの先生だといいな、イヤだな、とワシらはそれなりに冷静に分析していた。

「3年1組、井出先生」と校長先生の発表があった時、ワシらは思わず拍手した。

それまで3年1組の列の前に無愛想にツッ立っていた先生が一瞬ニコっとしたのを覚えている。実に、さわやかな笑顔であった。

ところで井出先生のワシへの評価はどうだったのかなと思い、改めて当時の通信簿をおっぴろげてみた。

昭和29年度といえば1年生の時であるが、**学校から家庭へ特に知らせたいこと**として、「学校での生活は大変よいが、放課後の活動を極端に嫌い、一目散に帰宅する」と記入されている。（この頃から残業拒否傾向）

そして「行動・生活の記録」として、

★自分のことは自分でする
☞しようと努力する
★礼儀を正しくする
☞心がけている
★人と協力する
☞わがままである
★責任を重んずる
☞いいつけられたことはやる
★物をたいせつにする
☞自分のものはだいじにする
★きまりを守る
☞ときどき注意される
★人と親しむ
☞たいていの友だちとあそぶ
★清潔整頓に注意する
☞いわれるとする

恐ろしいことに、今でもほとんど当てはまる。学期ごとにそれぞれ評価されるはずなのであるが、1年を通じて、なぜかすべて同じ評価であった。

ちっとも成長しなかったか、先生が手を抜いたかどっちかだろうが、3年生の時の成績が3学期ともこれまたそっくり同じ評価をされているところをみると、後者の可能性が強い。先生も忙しいのだ。

学業の評価だが、算数が5の他はほとんど3か4、体育は3学期とも2だった。

そんな井出先生に、平成3年の120周年記念で懐かしの湯島小学校でお目にかかることができた。お元気であった。なにより。

その後、湯島のスナックに卒業時のご学友が20人ほど集まって、メチャクチャ呑んで、歌って、踊って、騒いだ。

ワシの湯島小学校校歌のソロがあったことはいうまでもないだろう。

丸ノ内線に乗って

家から歩いて3分くらいのところわが母園中央会堂幼稚園が、さらに3分ほど歩いた所に**丸ノ内**線の**本郷3丁目**の駅がある。

小学生の頃、毎年夏休み直前の日曜日になるとおばぁちゃんと二人で**丸ノ内**線の赤い電車に乗って、池袋の西武百貨店に花火セットを買いに行くのが恒例であった。

小学校に進んだこの年の9月におじぃちゃんが死んでから、ずーっとおばぁちゃんと一緒の部屋で寝起きしていたから、自慢じゃないがカンペキに**おばぁちゃん子**である。

歩いて15分のところには上野の松坂屋があるし、何故わざわざ池袋まで花火を買いに行ったのかは今だにナゾであるが、毎年楽しみにしていたことだけは確かである。

☆

おなじみの騒々(そうそう)しい音を立てて、白いラインの入った赤い電車は**本郷三丁目駅**のホームを離れた後、いったん地上に出て**後楽園**に到着する。

今とちがってその頃の後楽園遊園地はもっと広かったもので、駅に近い順に第三・第二・第一と分れていて、ダントツ人気の**ジェット・コースター**は第一遊園地にあった。

第三にある**スリラー・カー**や**ダッゼム**を後にして、電車は再び地下へ、すぐ地上へ、左手に今度は車庫を横目に見て茗荷谷(みょうがだに)のホームにすべりこむ。

この**丸ノ内**線、起伏に富んだところばかりをわざと選んでいるのか、この他にも**御茶ノ水**と**四ッ谷**のあたりでも地上に出る。

ここでは川や線路・道路をまたぐから、当然、鉄橋がかかっている。

鉄橋だ！鉄橋だ！うーれしーなっ！とばか

りに、子供にとってみれば変化があって面白いのがこの**丸ノ内**線なのだ。

赤い電車は三たび地下に潜り、**新大塚**にとまって終着駅の**池袋**に着く。

この頃の地下鉄はそんなに便利な交通機関ではなかった。戦前からあった小汚ない**銀座**線（昭和２年開業。**浅草～上野**間）と**丸ノ内**線の二系統しかなく、それも赤坂見附（あかさかみつけ）が唯一の乗換え駅だったから、都電とか国電の方がはるかに身近で便利でだったのだ。

初乗り運賃にしても、国鉄や他の私鉄が20円でガンバっていた頃に、全線一律ではあるものの地下鉄はかなり早くから30円になっていた。というわけで、銀座に行く時は**丸ノ内**線（本郷３丁目～西銀座）よりも**山手**線（御徒町～有楽町）を利用したものである。

☆

それが急に便利になったのは、**東京オリンピック**が開催された昭和39年に、**日比谷線**の**北千住～中目黒**間が開通してからだ。

銀座でこの３線がドッキングされている便利さもあるが、北千住から埼玉方面に向けて**東武線**が、中目黒から神奈川方面に向けて**東横線**がそれぞれ接続され、相互乗り入れが可能になったことの方がはるかに価値がある。

これにより都心を挟んで東西が、その後の東西線と千代田線の開通により東西南北がつながり、うんと便利になったのだ。

☆

地下鉄を英語でＭＥＴＲＯ（メトロ）というが、これは主要都市を意味するMetropolis（メトロポリス）が語源だ。

バスや市電と違って交通渋滞に巻き込まれる心配がなく、長距離通勤も可能な地下鉄はその名の通りの**都市**交通の主役の座は絶対不動であろうが、創世期の功労者である銀座線と丸ノ内線だけが他の鉄道と相互乗り入れしていないのはなんとも情けない。

わが心の鯨カツ

自慢じゃないが、ワシは味オンチである。

ウマいマズいはなんとかわかるが、良い悪いはまるでわからない。

マトンやレバーが臭いと思ったことは一度もないし、多くの同級生が「恐怖の」と名付けた粉ミルクもまずいとは思わなかった。

冷めればともかく、暖かいうちならそんなに捨てたものではない。

昭和30年代の給食は大体ワンパターンで、ミルクとかたいコッペパンにマーガリン、そしてなぜか肝油（かんゆ）が定番だった。

肝油、緑黄色野菜が不足しがちなのでビタミンＡの補給源だったようだ。直径１㌢位の半球型のグミのようなもので、外側には砂糖がまぶしてあったりして結構おいしかった覚えがある。ここまでは毎日同じで、他になにか一品ついてくる。

カレーとか酢豚のように大量に煮込めるようなおかずが多かったが、中身はほとんど野菜でめったに肉にはお目にかかれなかった。

だから、たまに肉のメニューが出てこようものなら「おー肉だぞ！やったー」と、そりゃもう大騒ぎだった。

ただ、子供の舌にもはっきり安物の肉だナとわかるので、ネズミの肉だ、犬だ、猫だと噂しあっていたものである。一般家庭でも肉が食卓に上がることが珍しい時代だったからしょうがないといえばしょうがない。

そんな中で、唯一身元がはっきりしていたのが、今では貴重品となったクジラである。

固くてスジがやたら多いのは他の肉と何ら変らないがが、単品で固まりで出てくるのはクジラしかなかった。

それもなぜかカツになって出てきたのだが

これがワシの大のお気に入りであった。

「太郎のお好み焼き」のところでも紹介したが、鯨カツにも正式な食べ方がある。

いきなりガブリと食らいつくのはイナカモノとしてバカにされる。

安物の油で大ざっぱにイッキに揚げてあるものだから、コロモがはがれやすい。

だからというわけではないが、まずこれからいただく。

油の匂いばかりがやたら口の中に広がり、決して上品とは言えないが、それだからこそ飾り気のない味がする。

そのアブラっこさをごまかすためにコッペパンにとりかかる。

ただひたすら堅くてボソボソしていて、市販のパンと比べると給食用は甘みがない。

かむと時にはバリッと音がして、これが歯グキにあたるといたい。

ここでミルクを一口飲む。前述したようにマズいとは思わなかったが、コゲくさくてコクがない。温かければなんとか飲めるが、ジックリ味わうほどの代物ではない。

それから肉の部分にとりかかる。

とまあ、このようにコロモと肉を別々に食べるのが、この頃のワシであった。

実に貧乏臭いが、何しろ50㌘あるかないかのセコい鯨カツなので、そうでもしないと間が持てない。その気になればホンの一口でなくなってしまうのだ。

おかず一品とミルク、そして堅いコッペパンとマーガリンと肝油・・・これが昭和29年から35年までの、良いコの昼食であった。

今の食生活からは想像もできない程のみすぼらしさだが、それでも当時のワシは結構おいしがって食べた。

よほど好き嫌いがないからか味オンチだからか、ふだんロクなもの食っていなかったかは今もって定かでない。

本郷⇨湯島⇨上野東映

湯島に**切り通し坂**というのがあって、この坂を挟んで**湯島天神**と**岩崎**さん（三菱財閥）のお屋敷が向い合っていた。

湯島天神の**切り通し坂門**には「切通は天神社と根性院（こんじょうのいん）との間の坂なり。是、後年往来を開きし所なればいふなるべし。本郷三・四丁目の間より池之端（いけのはた）、仲町へ達する便道なり」との説明書があるところをみると、ワシの住んでいた**本郷**から**池之端**へ行くには**湯島**台地がジャマをしていたのだろう。

坂を下り切ったところが**天神下**の交差点でそのまま真っ直ぐ行けばＪＲの**御徒町**（おかちまち）**駅**に行き着くが、ここをを左に曲がる。

１００㍍も行けば突きあたり、**不忍**（しのばず）**の池**が広がっている。池に沿って３００㍍ほど右に行くと、とっくの昔になくなっているがかつてはそこに**今井**行きのトロリー・バスの停留所があった。トロリー・ポール（バスの上に突き出ている長い２本の角。パンタグラフ）が架線から離れたりくっついたりする度に青い電気の火花が飛ぶ。

それを見ているだけでも楽しかったが、このトロリー・バスにはとうとう乗る機会がないままに、昭和43年（1968年）にキッパリと廃止されてしまった。

ここから都電の線路を横切ると、すぐ右側に洋画封切二番館の**上野パーク劇場**が、その左はす向かいにワシが小学生の頃お気に入りだった**上野東映**があって、ここには毎週のように通ったものである。

あの「波を砕く岩」のイントロを何百回見たことか。「旗本退屈男」「若さま侍」「快傑黒頭巾」「水戸黄門」「赤穂浪士」「笛吹童子」などの思い出は次号。